

学会発表渡航支援報告書

(ふりがな) 氏 名	たけうち りお 竹内 里欧	所属・職名 Jyväskylä University, Postdoctoral student
e-mail		
発表題名 (英語)	An Analysis of the Political Discussion Sansuijin Keirin Mondo by Nakae Chomin: with Special Reference to the Failure of Communication between the Three Sages	
著者名	Rio Takeuchi	
会議名 (英語)	Graduate School of Contemporary Asian Studies seminar	
開催地(国、市)	at Turku University, Finland	
参加期間	2009年 8月 11日 ~ 8月 12日	
<p>報告者は、2009年8月11日から12日まで、フィンランドのトゥルク大学において開催された「Graduate School of Contemporary Asian Studies seminar」に参加し、発表を行った。報告者は、8月11日に、自身の研究(上記テーマ)について発表を行い、また、占領期の日本社会にかんする論文の指定討論者をつとめた。</p> <p><発表内容></p> <p>本発表では、中江兆民の代表作の一つである『三酔人経綸問答』(1887)をとりあげ、当時の社会背景の説明も加えつつ検討を行った。『三酔人経綸問答』では、酔人の鼎談という形をとりながら、近代日本社会が、西洋や東アジアとの関係において、どのような新しい公共圏を築いていくか、というテーマについて議論が行われている。本発表では、主に、『三酔人経綸問答』の思想的背景について、三人の登場人物がいかに造形されているかについて、三人のコミュニケーションの特徴について、検討を行った。特に注目されるのは、三人の会話が「討論」としてあまり成功していないという、コミュニケーションの特徴である。『三酔人経綸問答』は、タイトルに「問答」という言葉を含んでいるが、実際のところ、西洋化や理想主義を体現するとされる「紳士」と、国権主義や現実主義を体現するとされる「豪傑」との会話がうまくかみあっているとはいいがたい。「紳士」と「豪傑」の会話が成り立たず、両者が「理想」と「現実」という形で分離してしまうことは、次のような将来を無意識に暗示していると考えられるのではないかと。即ち、それは、西洋化の促進とナショナリズムの構築という、日本の近代化に課された二つの課題が、両者の対話や融合などによってではなく、周期的サイクルに分離すること、あるいは「理念(accepted view)」と「現実(personal feelings)」という形ですみわけられることによって解消されてしまう、そうした将来である。発表原稿は、約 8753words(英語)、5節で構成されている。</p> <p><質疑応答></p>		

学会発表渡航支援報告書

司会者および会場の参加者より行われたコメントで、特に重要と思われるのは、「① 会話分析について」、「② グローバリゼーションにかんする議論への適応可能性について」であった。①については、三人の登場人物の会話について、より精緻な分析が必要であるという指摘をいただいた。また、②については、本発表で指摘した *accepted view* と *public feelings* のすみわけという現象が、単に近代日本社会にのみ特殊な現象ではないということに十分留意すべきだと指摘いただいた。本学会では、フィンランドにおいてアジア研究を行っている博士論文志願者が一同に集まることにより、比較社会学的視点から活発な議論が繰り広げられた。

